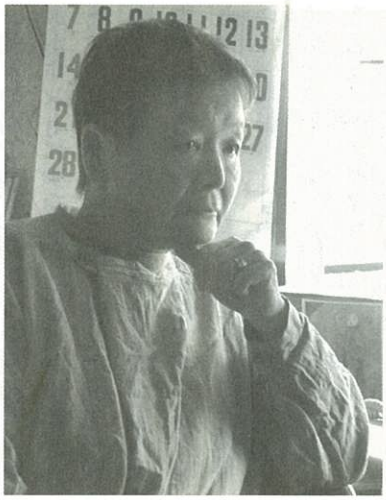
2005／冬

季刊　福井県和紙工業協同組合

和紙だより

―越前和紙への提言―

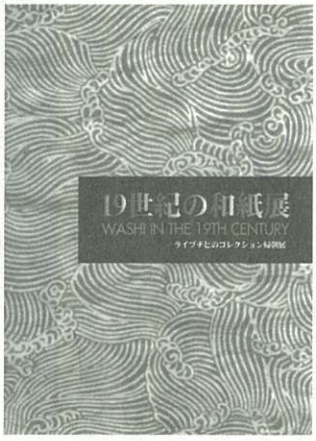


■ 伊部京子
和紙造形作家。和紙に新しい造形手法を導入し、世界二十カ国以上の美術館、舞台美術、パブリックアートなどでユニークな作品を発表。国際的に高い評価を受け、国内外の数々のデザイン、文化賞を受賞。日本・紙アカデミー常務理事。

■伊部京子さん（和紙造形作家）
「紙文化の振興を通じて」

●先人達の努力

全国の和紙産地の方とはお付き合いも長く、越前の方もお世話になっていてよく存じ上げています。越前は全国でもトップの産地で、それぞれ特色のある紙を漉いていらっしゃる力のある漉き場もありますので、ビジネスに関しては申し上げることなど何もありません。私が期待しますのは業界のリーダーとして二十一世紀の和紙をどう方向づけていかれるかということです。



「19世紀の和紙展」展覧会カタログ

以前「十九世紀の和紙展」という企画を手がけ、ドイツの国立図書館に所蔵されていた門外不出の和紙のコレクションの展覧会を開きました。想像してみてください。交通手段が船しかない時代に先人達は、コレクションとして残るほど、ヨーロッパに和紙を売っていた訳です。和紙は万博でも絶賛され、ヨーロッパの豪華な本や壁紙などにも多く使われていました。日本が開国したときの先人の心意気はすごいものがあり、彼らの努力には感銘を受けます。その中心にいたのが越前の和紙ですから、文化的・歴史的な意味でも「世界の和紙」を気にかけてリードしていかれることを期待いたします。

●「日本・紙アカデミー」の活動

一九七八年世界クラフト会議が京都で開催され、その時初めて和紙のセッションが設定されました。この会議で和紙はビックリするほど評判となり、それがきっかけとなって、八三年には、「国際紙会議'83京都」が同じ京都で開催されました。昔から日本の工芸のメッカとして生産地であり、二次加工地でもあり、大消費地でもある京都の役割は「くだらないもの」を作るのではなく「くだるもの」を作り、ノウハウを世界に発信する「お座敷業」であろうという世界クラフト会議の思想をそのまま継承し、会議を開いたのです。当時、紙は陶芸などに比べると一周遅れのランナーでした。そこへ海外の参加者がドッと参加したので驚いたものです。八八年には紙にまつわる展覧会、研究会、出版など紙文化に貢献し、世界に発信するという目的で「日本・紙アカデミー」が設立され、私はその創設当時からずっと関わっています。

●紙漉きは教育パフォーマンス

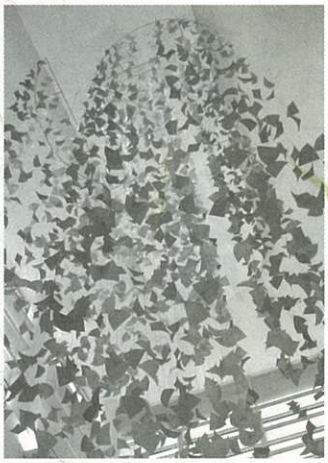
つい先日も展覧会の調査やモダンクラフトのショーへの出品などでアメリカを回ってきました。少し前まではモダンクラフトのスターはガラスでしたが、ガラスの時代は終わりつつあるのを感じました。私の感覚ですと次は木という感じがします。紙はアートという面ではまだ少し力不足かもしれませんが、アメリカでは独立工房と呼ばれる紙の工房が二千ほどあり、裾野が広いのです。日本は四百軒ないと言われています。アメリカのこうした工房の活動は「教育」という意味合いが強く、紙漉き職人はクラフトマンであり、いわば紙文化を伝えるパフォーマーなのです。幼稚園や小学校の子供達や市民講座で紙漉を教えることは、手仕事の技術や作法を学び、ついでに紙漉は水遊びみたいな面もあるので一種のリクレーションともなっていて大変人気があります。日本の紙職人の方も発想の転換をして、こういった教育的なワークショップをすることで一般の人に紙をより深く知ってもらい、裾野を広げ、後継者を新しく創出するチャンスとすることが出来るのではないでしょうか。

●生き残る道は文化

私はクリエーターですから、原料の配合から考え、紙の繊維から何を引き出すのかというのを現場で考えます。質の高い作品が出来ればそれが和紙の文化として残ると思うのです。昔は工芸だったものが機械生産に変わってしまって手技がすたれるというのは、宿命みたいなものですが、そこに文化性をきちんと持ち続けていれば生き残れると思います。デザイ

ン教育の場でも、紙づくりを教えるコースがホントに少なく、CGばかりでバーチャルなデザイン手法に走りがちな教育のバランスを取る意味でも、紙づくりを取り入れることは大変有効です。こうした肉体を使って学ぶことがないと、実体のないものづくりの教育だけになってしまいます。

私はよく言うのですが、人間は生きるためにものを作る。衣食住だけだったら動物もやっていることです。それに精神の営みとしてのものづくり「遊」を加えるという考え方があり、私も賛同しています。「遊」はただ遊ぶということではなく精神的で文化的なものです。茶道、華道しかりで、この「遊」に結びついた工芸は生き残っています。和紙には生きた文化としての豊富な知的ストックが背後にあり、その部分が今日の和紙の世界的な評価になっているのです。古きに学び、新しきを求め、紙と人との関係が広がり、あるいは深化していけば、ビジネスにも自然に波及すると思うのです。和紙をアピールしようという展示会やイベントも、中途半端な取り組みで終わらせずに、持続することが重要だと思います。



ウィスコンシン・ハート病院
エントランスホールのインスタレーション

ショップ・レポート

センスが光る和の提案

JapaneseStyle■KIMA　東京白金台

http://www.japanesestyle.jp

襖見本の前に立つ代表の木全恵美さん

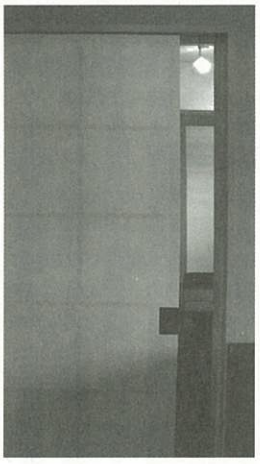
「有限会社　日本のもの、こと研究所」というちょっと変わった名前の会社が運営している「JapaneseStyle■KIMA」、和のインテリア提案スペースがある。平成十六年七月に設立されたばかりだ。ショールーム兼、教室の東京白金台のマンションの一室に代表の木全恵美（きまたえみ）さんをお訪ねした。

●現代の住空間に合う襖がない

着物で迎えてくださった木全さんはインテリアデザイナー。永年、全国5店舗ある襖専門店「からかみ屋」の仕事も手掛けている。今立とも縁が深い。

「もともとインテリアデザインの仕事をする時、いつも襖紙を選ぶのに困っていました。いいものがないのです。その上、住宅のモデルルームにもどんどん和室が少なくなっていく中で、和紙の持つ温かさや美しさ、機能的にも素晴らしいものがなくなってしまっていいのだろうかと感じていました。」

ショールームといっても、知り合いのお宅にお呼ばれしているような空間だ。部屋の基本的な作りは普通のマンションと変わらず洋風なのだが、とてもしっとりしていて落ち着く。その秘密は、自らデザインした襖、和紙の扉、障子、屏風、何気なく飾られている掛け軸、和食器が「木全ごのみ」とでもいったセンスでしつらえられているからだ。



太鼓張障子扉

●ショールームで実際に感じてもらう

マンション等の住空間でも和紙を使ったアイテムがいかにしっくり来るかを実際見てもらうために、このショールームはある。完全予約制。中でも、目を引くのが様々な襖見本。プレーンな鳥の子紙に同色の縞模様雲母摺（きらずり）の襖、鳥の子紙に薄い銀の篭目模様雲母摺襖、オーソドックスな意匠を着物の裾模様のように用いた襖、二つの模様をうまく合わせて貼り分けにした襖、雲肌を活かし同色の桜を散らせた襖など、都会的で大人のセンスが光っている。他にもソファーに合わせてデザインした楮柿渋紙の屏風や、サイドボードによく合う壁の和紙アートなどは、洋家具をむしろ引き立たせ、組み合わせの意外さが「とってもおしゃれ！」の一言。部屋と部屋をつなぐ扉は、太鼓張障子風、引手がシャープなシンプルデザインで、和紙を通して向こうの灯りがほの見えながら、空間をやわらかく仕切っている。カーテンの代わりに引っかけるだけの短い掛け障子をかけ、いわば自然光を面光源として捉えている。これらの商品はすべて注文生産となる。

書をアレンジした壁飾り

●少人数の教室で暮らしに活かす和紙を学ぶ

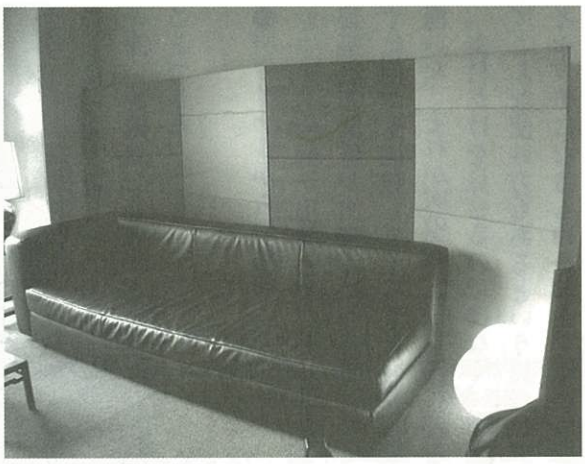
「日本文化の持っている気配を感じさせる空間、開けるか閉じるかではない中間をうまく演出する技法、季節や自然を取り込む高度な美学は、国際性もあり、とりわけ和紙にはその魅力を感じるのです。ここではお食事会等も時々やっていますが、これは和のものとその文化を生活の中で素敵に活かすかという実地の研究会のような意味合いがあります。」

ショールームでは、かな書道、和綴じ本、蒔絵、おもてなしの教室なども少人数を対象に催されている。和紙の活かし方は小物にも考える余地があるという。市場にある和紙の小物はかわいらしさに走りすぎていて、大人っぽいセンスのいいものがない。教室ではこういった伝統の小物の作り方などを学びながら、自分で和紙の手帳を作ってみたり、食と器をテー

マにおもてなし術を学ぶという試みも行っている。多様な和の良さを発見する出会いの場は、また作家の作品を常設展示するギャラリーとしても使用される。

●デザイン・コンサルの仕事

永年手がけてきたインテリアのデザインコンサルタントしての仕事は、住宅ショールームからの依頼が多い。というのは最近、和のテイストを住宅に活かしたいという客がいても、実際和室や和のしつらえについては余り知らない業者が多いために提案ができないのだそうだ。新築住宅、マンションのリフォーム、部屋の中にアクセントを付ける表具や屏風などの提案は、大変評判がいい。



ソファーにもよく合う楮柿渋紙屏風

例えば屏風ひとつについても、和紙の大きさを活かす加工法、洋間にも合う高さや幅、ハレとケの使い分けをする裏表のリバーシブル構造などの工夫が随所に見られ、空間に置いた時の収まり方も緻密に計算されている。まさにデザイナーとしてのキャリアと知識が活きる提案なのだ。

●和から発想すると

「私の扱っているものはアートではないので、生活の中で使ってほしいのです。和の良さを見つめていると、和紙に限らずいろんなアイデアが浮かんできます。今、私の着ている着物は男物です。風合いのある紬や渋い色味の染めなど男物の布地には女だからこそ着てみたいシックなものがたくさんあります。この黒漆の器は、夫婦椀としても使えますが、ご飯、汁物、煮物などがちょうどいい量が入るくらい。ふたもお皿として使え、場所を取らない入れ子式で器のふくらみのラインも見た目に美しくデザインしました。環境ホルモンが溶け出すという化学物質の器を使わず、このようなものをもっと日常使っていただきたいと思います。和紙は空気を通し、調湿作用もある。接着剤の使い方を間違わなければ、健康にも良く環境の時代にふさわしい素材です。」

木全さんのアイデアは限りなく膨らむ。

使い勝手のよい黒漆の器

■取り組み紹介

■杉原商店（福井県今立町）

「新しい出会いは、和紙の可能性を広げる」

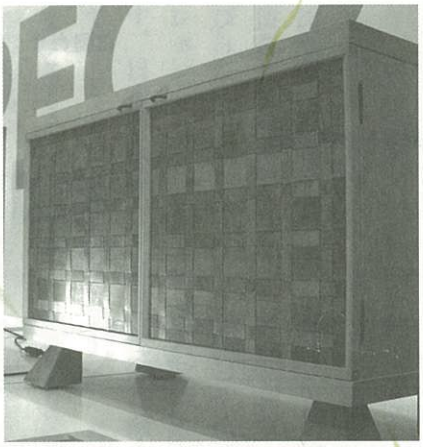
www.washiya.com

専務の杉原吉直さん

杉原商店は越前和紙の老舗産地問屋。ここ二～三年、従来からの商いの他に新しい動きにも果敢に挑戦している。ホームページも充実している。二〇〇四年一月には、パリで開催された家具見本市に招聘され、デザイナーと協働で制作した和紙を使った家具が展示された。専務、杉原吉直さんにお話を伺う。

●パリ出展のきっかけ

二〇〇二年、IPEC21 2002（国内最大のインテリア見本市）に漆を塗った和紙『漆和紙ーうるわし』を初めて出展。ディスプレイデザイナーと協力して作ったブースはいきなり「審査員奨励賞」を受賞。会場では、熱心に展示を見る人、質問する人が後を絶たず、設計士やデザイナーとも知り合いになった。ライブの魅力とでもいうのか顔を直接つきあわせての色々な話は大変刺激になったという。『漆和紙（うるわし）』は和紙であるが皮のようでもあり、高級感がある。これにインテリアデザイナーの創作欲は刺激されたようだ。翌年二〇〇三年には、同見本市で「デザイナーズショーケース」というデザイナー提案の企画展示に、『漆和紙（うるわし）』は家具に姿を変え出展された。インテリアプランナー中川誠一氏、イヨベ工芸社とのコラボレーション作品である。この年も、会場の審査投票でベスト3に選ばれ、二〇〇四年にも同展で奨励賞を受賞。三年続けての快挙である。



パリで展示された『漆和紙-うるわし』キャビネット

デザイナーズショーケースを見に来た「サロン・ド・ムーブル・パリ」（パリ国際家具見本市）の関係者が、二〇〇四年一月のショーで日本ブースを計画しているので、是非出展して欲しいとの誘いがあり、あれよあれよという間にパリへ行くことになってしまった。

●パリでの反応と課題

ヨーロッパ各国やアメリカからも多くのバイヤーやデザイナーを始め、一般人も多く訪れるサロン・ド・ムーブル・パリでは、和紙の物珍しさを越えて、実際に

商いをしたいという視点で様々なことを問われた。「既に和紙の魅力は皆さんよくわかっていらっしゃるので、もっと本物を見たい。販売店はないのかと聞かれました。一番問題は言葉と代理店機能を果たしてくれるような商社だと思いましたが、それよりも国外へ出て強く感じたことは、まず新しいニーズにあった国内の商いを確立しなければいけないということでした。」

●デザイナーからの刺激

ショーへ何回か出展して、デザイナーや建築家と関係が出来るにつれて、おそれずに何でも挑戦してやろうという意欲が湧いた。それが次の商いの土台作りなる。「素材だけを見せるのではなく、和紙ってこんな使い方もあるという具合にアイキャッチになるものを加えて展示しないと、見向きもされないですね。デザイナーのインスピレーションや感性に訴えるものでないといけません。」二〇〇四年のIPECでの展示も紙で作ったドレスを着せたマネキンや紙の帽子などをカラフルに展示してみた。会場は大変な人気で若い人も多く訪れ対応に追われる盛況ぶりだった。一見すぐ商売になりそうなものではないが、デザイナーなどの発想のきっかけ作りができれば、あとはあの時面白いお店があった、面白い和紙屋があったと少しでも覚えてもらえれば、半年後、和紙を使ってみたいなあという時に、思い出して相談してみようかという気にもなるのではないかと杉原さんは言う。インターネットで面白い紙を検索するデザイナーも確実に増えているという。改めて情報発信の重要性を再認識した。

IPEC2004 会場の様子

●産地問屋の役割

ビジネスチャンスを増やすのが問屋のやるべき仕事。従来出来上がってしまっている流通経路は大切にしながらも、新しい経路を自由な発想で造っていくのが現在の杉原商店が挑戦していることだ。「重要なのは、開発したものを絶対に商品にまで完成させて、売ってやるぞという気迫です。こういった仕事は、又エンドユーザーないしはエンドユーザーに最も近い人と直接やる。そうすれば、感覚的に市場の先鋭的な部分で何が求められているのか分かってきます。その上にどうしたら紙が売れるかを企画に合わせてよく考えていきます。」

インクジェットプリンター対応の『羽二重紙（はぶたえし）』シリーズ、『ちぎって名刺』シリーズなどもこうした過程で生まれた定番ものと言える。新分野への挑戦と独自の定番ものとを併行して考えていくことは今後とも続けていくつもりだ。

※『』は（株）杉原商店の登録商標です。

情報欄

● イベント情報

■ 第7回おんな職人50人展

伝統工芸士「五十嵐美佐子」さんの作品展示会、組合も共同出展
時：2005年1月6日～11日
場所：新宿　京王百貨店7階

■「越前・若狭」の物産と観光展

越前和紙を東京で紹介する物産展、29･30日には福井県無形文化財技術保持者福田忠雄氏による「墨流し体験」も開催。
時：2005年1月27日～2月1日
場所：新宿　京王百貨店7階

■ 伝統的工芸品展WAZA2005

全国の伝統工芸品を一同に集めて、実演・体験・即売が行われます。
時：2005年２月２日～2月８日
場所：池袋　東武百貨店10階

■ 「越前若狭の味と技紀行」　展

大阪　なんば高嶋屋で初めて開催される福井県の物産展
時：2005年２月２３日～2月２８日
場所：なんば　高嶋屋百貨店７階

● 越前和紙展示会
「和紙オートクチュール展」（仮称）のお知らせ

全国でもトップの和紙産地--越前ですが、どんな紙が漉かれているのか知っている方は意外に多くはありません。このたび、漉き場とのコラボレーションで、現代生活にあった和紙をテーマに、様々な表情の和紙の展示会を企画しました。マンションなどの現代住宅にも取り入れて頂きたいナチュラル・モダン・シンプルな和紙を中心にご覧に入れます。デザイナー、建築家、一般の和紙ファンの方に来ていただきインスピレーションを感じていただきたい展示会です。どうぞお越し下さい。

時：2005年3月30日～4月18日
場所：今立町、卯立の工芸館
展示時間：9：00AM～4：00PM　火曜休

お問合せ：福井県和紙工業協同組合事務所

※前号「和紙だより」秋号、「取り組み紹介」の記事中、中部ICネット理事長の「尾関昌弘」さんのお名前が「石田昌弘」さんとなっておりました。ここに深くお詫びいたしますと共に訂正します。

編集後記

各地の伝統産業の産地の方々とお話ししていると、皆さん口々におっしゃるのは地道な振興活動を何年も続けることの重要性でした。「継続は力なり」と言われますが、続けて活動を行うことの大切さを改めて実感しました。（ほ）

季刊-和紙だより　第5号(2005年冬号)　発行日：2005年1月5日
※無断での転写・転載はお断りいたします。
発行人：福井県和紙工業協同組合　長田昌久　住所：福井県今立郡今立町大滝11-11　TEL：0778-43-0875　FAX：0778-43-1142
編集人：（有）市民空間きょうと　右衛門佐美佐子・北條崇　編集所：〒604-8136　京都市中京区梅忠町28　TEL/FAX：075-213-4495